

ヤコブの手紙5章「苦しみの中で」

1A 金持ちに迫り来る不幸 1-6

1B 終わりの日の滅び 1-3

2B 不正な虐げ 4-6

2A 苦しみと忍耐 7-12

1B 主の到来 7-9

2B 模範の預言者 10-11

3B 誓いへの戒め 12

3A 癒しのための祈り 13-20

1B 病気のための祈り 13-15

2B 罪の赦しのための祈り 16-18

3B 迷いからの連れ戻し 19-20

本文

ヤコブの手紙 5 章を開いてください。最後の章になりました。ヘブル人への手紙と同じように、ヤコブは、ユダヤ人の信者に対して教えていますが、信仰によって忍耐を働かせることについてヘブル人への手紙が教えていたように、教えています。そして、迫害を受けていたので、それを避けるために世の友になる誘惑もあるので、それを避けることについても教えています。

前回、4 章の後半で、主を信じている者が、商売をして、みこころを求めることを怠る過ちについて、戒めていました。主のみこころの後ろに退くのではなく、自分がこうする、ああすると計画を立てても、自分のいのちは、霧のようにはかないのだと教えています。みこころであれば、生きていて、あれこれを行いますと言いなさいと、教えました。

そして、最後に、商売をしている中で、金もうけをしている中で、すべき良いことを行わないなら、それが罪であると言っています。貧しい人に分かち合うであるとか、福音を宣べ伝える働きを支えるであるとか、富により頼まない生活が大切なのです。それらの良いことを行わないなら、それが罪であると言っています。

1A 金持ちに迫り来る不幸 1-6

それで 5 章です。ヤコブは、富んでいる人の不幸を語り始めます。すでに、富んでいる人については、1 章 10 節で「自分が低くされることを誇りとしなさい。富んでいる人は草の花のように過ぎ去っていくのです。」と警告していました。ここでは、終わりの日のことを思って語り始めます。それが、終わりの日、主が来られる時に、厳しく裁くことについて語ります。

興味深いのは、使徒たちの手紙は、苦しみがある時に、主の再臨を語る人が多いです。パウロがテモテに対して、神のこぼを宣べ伝えるのに困難があっても、しっかりとやりなさいと命じるのですが、それは、「Ⅱテモ 4:1 生きている人と死んだ人をさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現れとその御国を思いながら、私は厳かに命じます。」ということです。次の手紙、ペテロの第一も始めから主の来られる希望を語りますが、「今しばらくの間、様々な試練の中で悲しまなければならぬのですが(1:6)」と断っています。

主が、信仰のゆえに苦しみ、試練を受け、時に経済的に貧しくなることさえある時に、ご自身の来臨を思い起こさせているのです。それは、その時にすべての歪みがまっすぐにされるからです。

1B 終わりの日の滅び 1-3

¹ 金持ちたちよ、よく聞きなさい。迫り来る自分たちの不幸を思って、泣き叫びなさい。

ここでの「金持ちたち」は、信仰を持っている人々とは限らず、いや、むしろ世において金を持っているすべての人々に対して語っています。旧約の時代から、金持ちに対する警告を、主は一貫して行っておられました。金を持っていること自体を裁いていません。アブラハムも、ヨブも多くの財産を持っていました。しかし、この二人はどちらも、主を恐れていました。金よりも、主を大事にしていたのです。その人が金を愛しているのではないことが分かるのは、貧しい人に惜しみなく施すことです。分け与えることです。あるいは、主のいけにえのために献げることもあります。金銭を愛することが問題なのです。その愛によって、いろいろな悪を行うようになっていきます。

それで、これから迫り来る不幸を思って、泣き叫びなさいと言っています。ここでの泣き叫びは、悔い改めているから泣いているのではなりません。主のみこころにそって悲しむことは、悔いのない救いに至る悔い改めを生じさせます。けれども、悔い改めないで、いつまでも誇り高ぶっているのであれば、泣き叫ぶことになります。この泣き叫びは、旧約聖書の預言書に数多く書かれていますし、黙示録 18 章では、巨額の富を集めていた大きな都バビロンが、滅んだのを見て、泣き悲しんでいる姿が出てきます。自分のよりどころが全て失われてしまうからです。

² あなたがたの富は腐り、あなたがたの衣は虫に食われ、³ あなたがたの金銀はさびています。そのさびがあなたがたを責める証言となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くします。あなたがたは、終わりの日に財を蓄えたのです。

富が腐るとありますが、金銀に限らず、イエス様が金持ちについて語られた時のように、豊作で穀物が倉に多くあるような状態です。それらが腐るということです。そして衣は、当時は今よりもはるかに貴重です。十字架につけられる前にはがした、イエス様の衣を、兵士たちがぐじ引きしたのは、その衣を古着として売ることができるからです。けれども、高級な衣を身にまとっているのは、

金持ちであることの象徴でした。それが虫に食われます。そして、金銀は腐食してしまいます。

このことを、イエス様が語られましたね。だから、こんなことにならないように、天において富を蓄えなさいと教えられました。「マタ 6:19-20 自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。ここでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。自分のために、天に宝を蓄えなさい。そこでは虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません。」

2B 不正な虐げ 4-6

富んだ者が行っている悪に対して、主が容赦ない裁きを行われることを次から列挙します。

⁴ 見なさい。あなたがたの畑の刈り入れをした労働者への未払い賃金が、叫び声をあげています。刈り入れをした人たちの叫び声は、万軍の主の耳に届いています。

当時の社会では、日雇い労働はその日の賃金が生死を分けるほどの苛酷さがありました。それで、律法では厳しく、その日のうちに賃金を支払えという神の命令があります(申命 24:14-15)。この叫びは、あまりにも恐ろしい搾取に対する困窮から出てきた叫び声です。それを、主ご自身が聞いておられます。ここで「万軍の主」が聞いておられる、とあります。つまり、神は力をもってこれら搾取している者たちに対して戦われる、ということです。

⁵ あなたがたは地上でぜいたくに暮らし、快樂にふけり、屠られる日のために自分の心を太らせました。

快樂のために、貧しい者たちを踏みつけている悪を、例えば、預言者アモスが語っています。(2:6-8) イエス様が金持ちとラザロについて語られたのも、同じ内容です。「16:19-21 ある金持ちがいた。紫の衣や柔らかい亜麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。その金持ちの門前には、ラザロという、できものだらけの貧しい人が寝ていた。彼は金持ちの食卓から落ちる物で、腹を満たしたいと思っていた。犬たちもやって来ては、彼のできものをなめていた。」

そして、贅沢に暮らし、快樂にふけて、それで太ったからだを、いけにえのために屠られる牛のように、語っているのです。脂肪は、交わりのいけにえとして主の祭壇で焼かれるのですが、その脂肪は主のものはずです。豊かさは主にあるのです。それを自分のものとしている時に、心を太らせていることになる、つまり高慢になっているのです。

⁶ あなたがたは、正しい人を不義に定めて殺しました。彼はあなたがたに抵抗しません。

このことも、当時はしばしば起こっていました。借金のある人を、牢屋に入れる権利が債権者に

ありました。それで、悪いことをしていないのに、ただ借金があるということで、牢屋に投げ入れたのです。圧倒的な力の差によって、何も抵抗することができません。主は、そのために貧しい人のため、悪いことをしていない人のために戦われるのです。

紀元 70 年、この手紙が書かれて間もない時ですが、エルサレムがローマによって破壊されました。神殿も破壊されました。この時に、自分たちは守られると思っていたけれども、滅ぼされた人々がいます。祭司長などサドカイ派の人たちです。彼らは上流階級に属しており、イエス様が宮清めをされたように、宗教の中で商売をしていました。そうした者たちが不正を働いていて、神の御怒りがくださったとも言えます。

それから、異邦人のローマについても、神の厳しい裁きがあります。巨大を、富を集めている中で、聖徒たちの血が流されていったのですが、それを黙示録 17-18 章は、大淫婦として登場させています。その女は、杯で、聖徒たち、預言者たちの血を飲んでいきます。ローマは「パンとサーカス」という言葉がありましたが、市民の不満にガス抜きをするために、食べ物とエンターテインメントを与えていました。コロッセウムでは、グラディエーターという剣闘士たちの戦いがあり、野獣が連れて来られてそれと戦いました。そこに、キリスト者たちが投げ入れられ、生きた獅子によって喰い殺されるのを、エンタテとして観客が見ていたのです。

このように、金の集まるところに大きな悪があります。大きな悪があるところには、金がその裏で動いています。主は怠りのない裁きを行われます。

2A 苦しみと忍耐 7-12

そのような中で、苦しみを受けているのがキリスト者でした。そして今も、信仰によって生きる時に、必ずしも世の中の的に成功するわけではないのです。むしろ、疎外されて生きることになります。そこで教えられるのが、主の到来です。悪者にとっては、主の到来は恐ろしいことです。聖徒にとっては、同じ主の到来は、救いであり慰めです。この日を覚えて、耐え忍びなさいと次に勧めます。

1B 主の到来 7-9

⁷ ですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は大地の貴重な実りを、初めの雨や後の雨が降るまで耐え忍んで待っています。

兄弟たち、と呼びかけています。信者たちに呼びかけています。それは、「主が来られる時まで耐え忍びなさい。」ということです。私たちは午前礼拝で、この箇所を詳しく見ました。主が来られる時に、こうした悪者たちに対して、公正な裁きを行われます。大事なものは、その時まで耐え忍んでいられるか？ということでもあります。イエス様は、世の終わりについて、いろいろな困難があるけれども、「最後まで耐え忍ぶ人は救われます。」と言われました(マタイ 24:13)。そして、ヘブル人へ

の手紙で、最後まで確信を保っているならば、キリストにあずかることができると。ですから、忍耐が必要なのです。「ヘブル 10:36 あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは、忍耐です。」

そして例として、農夫の耐え忍びを取り上げています。大事の貴重な実りを、雨という、自分では全くコントロールできないものを待つことによって、期待できます。イスラエルの地域は、雨季に入った時の初めの雨で、土地が柔らかくなり種蒔きをすることができます。そして、雨季が終わる時の後の雨で、勢いがついて実が結ばれます。その雨によらなければ、作物の実りは期待できないので、自分がああして、こうしてという努力でどうにかなることではないのです。ですから、世において不正があっても悪があっても、それを自分たちがコントロールするのではなく、むしろ、正しく裁いてくださる主に任せて、耐え忍ぶということであります。

午前礼拝でもお話ししましたが、ただ待っているだけではないのです。土地を耕し、種を蒔き、水を注ぎ、虫がつかないようにするなど、養い育てていく日々の汗水流す、労苦がともなうのです。主を待つということは、このように、日々与えられた、主の働きに忠実に関わり続けるということです。そうすることによって、主が来られる時に、そこからの実をこの方が受け取って、私たちに報いを与えてくださいます。

⁸ あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主が来られる時が近づいているからです。

耐え忍び、そして心を強くしなさいと勧められています。世からの圧迫を受けて、心が弱くなってしまいます。けれども、強くしなさいと励まされているのです。

そこで大事なことは、主にお会いする時が近いからだということです。主が来られる時について、使徒たちは今すぐにでもその時が来ることを、一貫して話していました。聖霊が注がれて、ペテロが初めて説教しましたが、こう話しています。「使 3:19-20 ですから、悔い改めて神に立ち返りなさい。そうすれば、あなたがたの罪はぬぐい去られます。そして、主の御前から回復の時に来て、あなたがたのためにあらかじめキリストとして定められていたイエスを、主は遣わしてくださいませ。」聞いている人々が生きている時に、戻って来ることを前提にして話しているのです。そして使徒たちの手紙は、一貫して、すぐに来られることを語っています。パウロも、ペテロも、ヨハネも、ユダも、そしてここでヤコブも、みな語っています。

でも、二千年経っていますが、戻ってきていないという人たちがいます。そうではないのです、主はこの世に来られてからは、どの世代の人も、すぐに主が来られるかもしれないと信じて生きてほしいと願われているのです。がけつぶちに近づいたら、その横を崖と並行して歩いているようなものです。主が来られた後の世界は、主が再び来られるのが近いということを知りながら、いつの世

代でも生きるのです。

⁹ 兄弟たち。さばかれることがないように、互いに文句を言い合うのはやめなさい。見なさい。さばきを行う方が戸口のところに立っておられます。

兄弟の悪口を言うことが、いかに神のみこころを損なっているかを、3章と4章でヤコブはじっくりと話していました。ここでも改めて、文句を言い合うことを戒めています。なぜなら、主がすぐにでも来られるので、その時にこのことのために裁かれるからです。戸口にまで来られているのです。

終わりの日に近づけばそれだけ、困難が増します。私たちの苦しみが増します。自分たちに理解できないことが起こります。そこで、主を見つめて、みこころを行うのではなく、自分たちで何とかしようしたり、理解しようとする、だんだん、自分を神の位置に置いていくようになります。それで、その原因や責任をだれかに押し付けるようになるのです。しかし、主を恐れなさいといけません。

2B 模範の預言者 10-11

¹⁰ 兄弟たち。苦難と忍耐については、主の御名によって語った預言者たちを模範にしなさい。

苦しみと忍耐については、私たちに預言者という信仰の先輩がいることをヤコブは教えています。預言者で苦しまなかった人はいなかったといってよいでしょう。その筆頭はエレミヤですが、彼は嘆き、悲しみの預言者と呼ばれました。エレミヤの言葉を聞いて、すなおに受け入れる人というのは、ほとんどいませんでした。神のことばを語れば語るほど、彼は反対され、迫害を受けました。しかし、彼は最後の最後まで、神のことばを語ったのです。

¹¹ 見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いだと私たちは思います。あなたがたはヨブの忍耐のことを聞き、主によるその結末を知っています。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられます。

苦しみと試練の中で耐え忍ぶのに、最も典型的な模範はヨブであります。彼は、完全ではなかったというのは慰めです。彼は主に不平をぶつけました。しかし、彼は主を呪うことはしませんでした。最後までしませんでした。そして主が彼に現れてくださり、二倍の慰めをもって慰めてくださったのです。主は、その間、ヨブが苦しんでいる時にも、慈愛に富み、あわれみに満ちていました。

3B 誓いへの戒め 12

ところで、耐え忍ぶことについては、すでに関連することをヤコブは手紙の冒頭で話していました。試練にあつたら、信仰が試されて、忍耐が生まれると話しました。そして、その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、成熟した、完全な者となると教えていました。このように、忍耐が霊的な成熟をもたらします。そして、それは信仰が、ただ語っていることではなく、みことばを聞いて行ってい

ることにつながります。試練があるからこそ、信仰が清められて、みことばをただ聞くだけでなく、行っていくのです。そこにある知恵が、神からの知恵なんですね。そこで次、12節ですが、誓うことについての話題にヤコブは移ります。

¹² 私の兄弟たち。とりわけ、誓うことはやめなさい。天にかけても地にかけても、ほかの何にかけても誓ってはいけません。あなたがたの「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」でありなさい。そうすれば、さばきにあうことはありません。

「とりわけ」とヤコブは言っています。主の来臨を思って、苦しみの中にあっても耐え忍んでいく中において、とりわけ、誓わないようにしなさいと勧めています。誓うとはどういうことでしょうか？自分の言ったことを果たすことです。自分の言った通りに責任を果たして行なう、ということです。けれども、多くの場合、自分の言っていることを行なわない、という問題があります。ですから、何やらかにやら話すのではなく、主から命じられたことについて、「はい」と言って応答しなさい、ということ。そして、もし主の命令に違反していることをしているのなら、「主よ、私はこの命令に従っていませんでした。」と、「いいえ」と言いなさい、と言っています。

ヤコブはここで、イエス様の命令を思い出しながら書いています(マタイ 5:33-37)。当時のユダヤ教徒は、神の名によって誓うことには縛られているが、天や地を指して誓っていることは縛られていない、ゆえにその誓いから解かれると教えていました。それでイエス様は、ここでヤコブが言及しているように、「天にかけても地にかけても、ほかの何にかけても誓ってはいけません。」誓ってはならないと言われました。

3A 癒しのための祈り 13-20

私たちが苦しみを耐え忍んでいるに当たって、キリスト者として何をしなければならないのか？それは、13節からの言葉を読んでいきますと、「祈りなさい」ということです。神に対して、祈りをもって応答します。

1B 病気のための祈り 13-15

¹³ あなたがたの中に苦しんでいる人がいれば、その人は祈りなさい。喜んでいる人がいれば、その人は賛美しなさい。

苦しみの中にいるとき、祈ります。私たちは苦しむ時に、つぶやいたり、兄弟の悪口を言ってみたり、軽々しく誓ったりする誘惑があります。しかし、苦しむ時の応答は、神に対して祈ることです。困難のあるこの世において、キリスト者の祈りがますます盛んになることが、苦しみから救われる道となります。思い出すのは、東日本大震災が起こった時、被災地に援助物資を手渡す時に、最後に祈りました。誰一人としていやがった人はいません。苦しむ時に、人の理屈はいらないからで

す。神に祈り、人の思いを超えたご臨在を必要としているからです。

そして、自分の霊が喜びに支えられることもあります。そこでも、有頂天になったり、自分を高ぶらせたりするのではなく、素直に神に栄光をお返しする、賛美をすることです。苦しい時には祈り、喜ぶ時には賛美することによって、私たちの霊は神の前にへりくだることができます。

¹⁴あなたがたのうちに病気の人がいれば、教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい。

苦しみの中にいる人の中でも病の人たちに焦点を当てています。イエスが、この地上で宣教の働きを行われた時に、病のいやしを、貧しい者に対する福音であると言われました。病が癒された時に、イエス様は「救った」という言葉を使われました。(例: マルコ 5:34)そこでヤコブは、キリスト者の共同体は、互いに祈り、苦しみの中で祈り、そして病のある人々のために祈ることによって、キリストがそこにおられるのだ、キリストの臨在を知るためには弱い人、病の人と共にいることなのだ、と思っていたのだと思います。

ヤコブは、具体的に病気の人々がどのように祈られるべきか、その指導を与えています。第一に、「招く」ことです。イエスが病の人を癒された時に、その多くが自らイエスのところに来て、癒しを求めました。ベテスダの池の足なえの男など、イエス様が近づかれた場合もありますが、多くがイエス様に近づいていきました。多くの人々が、教会において牧者や長老が自分のところに来てくれることを待っています。「なぜ、うちの教会の牧師は祈ってくれないのか。」と言う人もいます。しかし、癒しのための祈りは、その人が癒しのための強い願いがあって、初めて成り立つものです。

そして第二に、癒しのための祈りの時は複数の教会指導者がいるということです。新改訳は正しく訳しています、「教会の長老たちを招き」と、長老が一人ではなく二人以上いるのです。私たちがカルバリーチャペル・コスタメサの教会にいた時に、「長老たちによる祈り」という小さな集まりがありました。長老の方が必ず二人、病のある人のためにオリーブ油をつけて祈ります。私の妻は、指を包丁で深く切って、それが完全に直っていなかったので、祈ってもらったら、家に帰る途中で直りました。その時ついでに子供も与えられるように祈ってもらったのですが、妊娠しました。残念なことに流産になりましたが、胎も癒しを受けたのです。

なぜ、二人以上なのかということをお考えすると、ある人は、「神の栄光が祈った人に与えられないため」と言いました。なるほど、と思いました。癒すのは神なのですが、私たち人間は弱い者で、その器をあがめてしまうのです。

そして、「オリーブ油」を塗ることについてですが、旧約の時代はオリーブ油が病の治療にも使

われていたことを伺うことができます。また、油がゼカリヤ書 4 章の燭台の幻にあるように、神の御霊を象徴していることも知っています。したがって、聖霊の分け与えてくださる賜物として、癒しの賜物がありますが、それを象徴しているので、信仰によって癒しを求める時に使うのです。

¹⁵ 信仰による祈りは、病んでいる人を救います。主はその人を立ち上がらせてくださいます。もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。

ここでの「信仰」は、賜物としての信仰です。賜物として与えられ、癒されると信じることのできる瞬間があります。それを働かせて、癒しを宣言します。私たちは信じて祈ります。これは神の命令です、ヤコブもこの手紙の初めに、「少しも疑わずに、信じて願いなさい。(1:6)」と言いました。そしてイエス様は何度も、「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。」と言われました。ですから、信仰をもって神に近づきます。

そして、「主はその人を立ち上がらせてくださいます。」とは、これは、イエス様が足なえを起き上がらせてくださったこと、また使徒たちも同じように、イエスの御名によって立たせたことを思い起こさせます。そして、これは復活の力も思い起こさせます。墓に葬られているのに、神がイエスを立たせました。この復活の力が、聖霊によって私たちの内に働き、そして病が癒されるのです。

そして、病のための祈りが、罪を言い表すことと関連づけて話されています。これもまた、イエス様の宣教の働きに見ることができるものでした。中風の者が運び込まれた時に、「あなたの罪は赦されました。」とイエス様は宣言されました。ベテスダの池で足が直った男にも、「罪を犯さないようにしなさい」と言われました。したがって、霊的に癒されるということと、肉体の癒しというのに関連している時があります。

イザヤ書 53 章の預言について話します。「彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。(5 節)」イエス様は肉体の傷を負われました。それは、罪というものが私たちに傷をもたらすという考えに基づくものでした。心に傷を受けるだけでなく、人全体に対して、肉体も含めて傷を負うことになるということです。そこで、罪を犯したその霊的な傷に対して、イエス様は肉体の傷を受けることによって、霊的な癒しも、そして肉体の癒しも与えられます。この預言の言葉は、肉体の癒しにも霊的な癒しにもどちらにも使われます(マタイ 8:17、1ペテロ 3:18)。

2B 罪の赦しのための祈り 16-18

¹⁶ ですから、あなたがたは癒やされるために、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。正しい人の祈りは、働くとき大きな力があります。

ヤコブがここで焦点を当てているのは、イエス様の言われた「あわれむ者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。」という御言葉です。これまで、兄弟が仲間を裁くことについて、また心の中で差別をすることについて強い戒めを与えました。貧しい者に対する心遣いを示しました。キリスト者の交わりが、弱まった人々、そして罪を犯してしまった人々に対して、癒しを与えるためのイエスの働きが行われる所だということなのです。ですから、そのような人を受け入れるという雰囲気があって、それで互いに罪を言い表し、それで互いのために祈るように命じられています。

これは、御霊が働かれた時に行うことができます。そして思慮深く行わなければいけません。罪を犯したことを公に告げても、その具体的なところまで話さなくてよい場合がほとんどです。聖霊が働き、兄弟に自分の悩みや苦しみ、その罪を打ち明けるのであれば、深い憐れみをもって祈る時に、そこに罪の赦しがあるし、また病の回復があります。

¹⁷ エリヤは私たちと同じ人間でしたが、雨が降らないように熱心に祈ると、三年六か月の間、雨は地に降りませんでした。¹⁸ それから彼は再び祈りました。すると、天は雨を降らせ、地はその実を实らせました。

祈りの力についての励ましです。16 節に「正しい人の祈り」とありますが、それは私たちが考えるような、正しい人のことではありません。信仰を働かせて義と認められている人です。例として出しているエリヤは、「私たちと同じ人間」と書いてあり、実に彼は落ち込んで自殺願望まで出てきた人でした。しかし、自分自身に頼らず、神のみを自分の正しさとし、この方の知恵と力によって生きている人のことです。

私がカルバリーの教会の中の、スクール・オブ・ミニストリーに通っていた時に、ベトナム系アメリカ人の兄弟がいました。彼は霊的にきちんとしていなかった時に、自分が祈って大きな癒しを経験した人のことを話していました。その時に自分ではなくて、イエス様の名前の力なのだと悟って、神に立ち戻ったということでした。

ヤコブは、祈りの力についてエリヤを取り上げています。今、お話ししましたように大事なものは、「私たちと同じような人」だということです。今、エリヤが現代にタイム・スリップして、現代人の服装をさせたら、彼がそのような偉大な、大きな働きをしたのか分からないと思わせるような外見でありましょう。彼は私たちと全く同じ、喜怒哀楽を持っている人であり、普通の人だったのです。ですからヤコブが強調しているのは、私たちが高度な霊的状态に達するから祈りが聞かれるのではない、ということなのです。祈りの特権は、信じる者すべてに与えられるのです。

大事なものは、熱心に祈ることです。エリヤの祈りが聞かれたのは、雨が降らないことについては言及されていませんが、雨が再び降る時には七度の祈りで、ようやくその兆しが見えたということ

です。バアルの預言者との対決の後、彼はアハブに言いました。「Ⅰ列王 18:41-45 エリヤはアハブに言った。「上って行って、食べたり飲んだりしなさい。激しい大雨の音がするから。」そこで、アハブは食べたり飲んだりするために上って行った。エリヤはカルメル山の頂上に登り、地にひざまずいて自分の顔を膝の間にうずめた。彼は若い者に言った。「さあ、上って行って、海の方をよく見なさい。」若い者は上って、見たが、「何もありません」と言った。するとエリヤは「もう一度、上りなさい」と言って、それを七回繰り返した。七回目に若い者は、「ご覧ください。人の手のひらほどの小さな濃い雲が海から上っています」と言った。エリヤは言った。「上って行って、アハブに言いなさい。『大雨に閉じ込められないうちに、車を整えて下って行きなさい。』」しばらくすると、空は濃い雲と風で暗くなり、やがて激しい大雨となった。アハブは車に乗って、イズレエルへ行った。」ひざの間に頭を入れて祈って、その結果をなんと七度も若者に見に行かせました。そしてようやくのこと、ほんの少し雲が見えたのです。それを信仰をもって大雨が降る、としたのです。

3B 迷いからの連れ戻し 19-20

¹⁹ 私の兄弟たち。あなたがたの中に真理から迷い出た者がいて、だれかがその人を連れ戻すなら、
²⁰ 罪人を迷いの道から連れ戻す人は、罪人のたましいを死から救い出し、また多くの罪をおおうことになると、知るべきです。

ヤコブの手紙は、弱っている者への憐れみ、貧しい者たちの幸い、隣人を自分自身のように愛すること、そして行いの伴ったところの言葉、言葉だけが遊離して軽々しい誓いをしていない姿、こういった憐れみの共同体がイエス・キリストの福音であり、ヤコブの手紙はそうしたキリストの愛の実践を強調しているのです。

「真理から迷い出た者」とあります。イエス・キリストの真理から迷い出る時に、もちろん行ないにおいても迷い出ます。罪を犯し、罪の生活に入っていきます。その時に必要なのは、「連れ戻す」ということです。ガラテヤ書にも同じことが書かれています。「6:1-2 兄弟たち。もしだれかが何かの過ちに陥っていることが分かったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、キリストの律法を成就することになります。」柔和な心が必要です。そこには、自分自身も誘惑に陥るという前提があるので、憐れみの心を持つことができます。そして重荷を持つのです。これが隣人を愛する、つまりキリストの律法を全うすることです。

それを行なうと、20 節にあるように、二つのことを達成することができます。「罪人のたましいを死から救い出」すとあります。パウロが、近親相姦の罪を犯した男についてこう言いました。「Ⅰコリ 5:5 そのような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それによって彼の霊が主の日に救われるためです。」主が戻ってこられる日に、その霊が救われるのです。

そして、もう一つは「多くの罪をおおう」ことです。使徒ペテロも言いました。「Ⅰペテ 4:8 何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。」これは罪を隠蔽することではありません。罪を犯した後に、悔い改めた者についてのその罪を、思い出さないということです。このような愛の共同体があれば、私たちは何と幸いなことでしょうか！過去の罪が問われないのです。けれども神の恵みによって、その罪はもう犯したくないと悔い改めています。だからだれをも裁けず、ただキリストのみを愛して、キリストをあがめることを喜びとしています。そして、主が戻ってこられる時まで慎み深くしており、忍耐しているのです。祈りあって、そして共に賛美し、祈ります。

これらのことが、神のみこころです。主が来られる時、困難があります。しかし、さまざまな試練にあっても、それでも、憐れみを示すという教会の働きに思いを集中させるのです。そして、裁きについては主にお任せします。このことが、終わりの日における教会の働きなのです。